雪中の温泉地

日本人の日常生活の中での憧れは何といっても「温泉でも浸かってゆっくりしたい」であろう。私の住む神戸市内には有名な有馬温泉がある。更に兵庫県には城崎温泉、湯村温泉と名前を挙げれば切りがない。日本全国となると 2500 を超える温泉地があり、利用客の延べ人数では年間 1 億 4 千万人というから驚きだ。

温泉大国・日本はどのようにして生まれたのか。古来温泉は湯治療の役割を果たしていた。火山列島であるがゆえに身近な所で温泉が噴き出している自然環境に恵まれていた。そして気候状況でも夏の高温多湿と冬の寒さ、春秋の風光明媚観光シーズンが上げられる。近年では近くて手軽に行けるスーパー銭湯も温泉をくみ上げている。

新潟県南魚沼郡湯沢町に越後湯沢温泉はあった。元は静かな湯地場であった。ここを舞台に川端康成は小説「雪国」を書き上げている。そして多くの文人達も訪れている。森鴎外は明治 15 年の秋に湯沢にて馬を雇って温泉街を通る様子が文献に残っている。また与謝野晶子は昭和 7 年この地にあって多くの和歌を詠んでいる。「北海へ越の雪解のにごり川おもむく音を聞く湯沢かな」「若葉する湯沢を巻けり大かたは越の五月のしら雪の山」。更に北原白秋は昭和 12 年に湯沢の宿にて「山国はすでに雪待つ外がまへ簾垂りたり戸ごと鎖しつつ」「山の宿屋内暗きに人居りて木蓼（またたび）食めり冬をひそけく」と。皆さん温泉をこよなく愛していたのですね。

ここで私も一句「春遠し悲鳴を上げて湯に浸かる」失礼しました！　　撮影 2013 年春